

鉄砲洲神社素読論語 解説

(平成 24 年 5 月 11 日)

【一五】**朋友** 死して帰する所無ければ、曰く、我に於いて殯せよと。**朋友の饋** は、**車馬**と**雖も祭の肉**に**非**ざれば**拝**せず。

友人が亡くなって頼る所がない場合は、私の家に棺を置いて葬式をしても良い。友人からの贈り物が立派な車馬のようなものでも、お下がりの肉でなければ丁寧に辞儀はされなかった。きちんとおまつりをした神聖なものに対しては、お辞儀をするけれども、そうでないものには、それなりの礼はとらなかった。

【一六】**寝**ぬるに**戸**せず。**居**るに**容**づ**く**らず。**斉衰**の**者**を見れば、**狎**れたりと**雖も必ず****変**ず。**冕者**と**瞽者**とを見れば、**褻**れたりと**雖も必ず****貌**を以てす。**凶服**の**者**には**之**に**式**す。**負飯**の**者**に**式**す。**盛饌**有れば、**必ず****色**を**変**じて**作**つ。**迅雷****風烈**には**必ず****変**ず。

寝る時に、死んだような形(仰向けで大の字になる)はしなかった。今とは違いますが、当時は仰向けの大の字で寝るのは死んだ人のようなので、その様な形で寝なかったと云われています。寝る時には横向きで寝るのが健康に良いといえます。

家にいる時には難しい顔はしない。斉衰は喪服の名前なので、斉衰を着た人を見た場合は、懇意にしている人でも見かけたら居ずまいを正す。冕者は貴人で、瞽者は盲人、そのような人達を見た場合は、仲が良くても礼儀正しくする。凶服は喪服です。式すというのは、馬車に乗って横に手をついて礼をするという事ですから、喪服の人に会った時には、やはり礼儀正しく礼をする。

負飯の版は、木簡で作られた戸籍台帳。負は背負う。戸籍台帳を背負っている人に出会った時には礼儀正しい作法をとった。立派な御馳走があった場合は、必ず顔色を変えて態度を改めてきちんと立ち上がる。迅雷は急に鳴りだす雷、風烈は突然激しく吹く風ですから、突然風雨激しく鳴りだす雷この時の顔色が変わったというのは、怖かったのではと考えられます。

孔子が、ひとつひとつ礼儀作法をきっちりしたという事は、もうかなり当時の礼儀作法は乱れていたと思いますので、わざと周りの人に分かる様に礼儀作法を丁寧に言い、手本を示したのではと思います。

今まで顔色が変わるといのは、礼儀作法で顔色が変わりましたが、後半の部分の顔色が変わるといのは、雷が鳴って怖いということでしょう。

【一七】**車**に**升**るときは、**必ず****正**しく**立**ちて**綬**を**執**る。**車**の中にては、**内顧**せず、**疾言**せず、**親指**せず。

馬車に乗る時には、必ずまっすぐ立って綱を握る。電車で考えれば分かりやすいと思いますが、電車のつり革を握るイメージです。馬車に乗っている時には前を向いて立ち左右や後ろを省みない。きちんと前を向いて馬車に乗るのが正しい馬車の乗り方です。馬車の中では、せわしく話したり指をささない。

この当時、馬車に乗る人は貴族ですので、周りの一般庶民が良く見ているから、貴人としてのふさわしい行動をとるように気をつけて乗るという事です。

【一八】色^{いろ}みて^こ新^{あら}に^あ攀^かり、翔^{かけ}りて^{のち}後^{とど}に^い集^あまる。曰^{いわ}く、山^{さん}梁^{りやう}の^し雌^ち雉^と、時^{とき}なる^{かな}かな 時^{とき}なる^{かな}と。子^し路^ろ 之^{これ}を^き供^{きやう}す。三^みたび^か嗅^かぎて^た作^たつ。

人の気配で、雉が驚いて飛びあがる。飛びあがってグルグル回って木に止まる。孔子が言うには、山中の丸木橋の上にいる雌の雉の飛ぶ様子を見て、タイミングが良いと雉のことを褒めた。

この先の訳しかたは、三つほどあります。

「嗅ぎて」を「かぐ」と読みますと、子路がこの雉を撃って雉の料理をつくり、孔子に差しあげた。孔子は雉の料理の氣を嗅いで、食べずに立ち上がった。これは孔子が子路に武骨者ということを暗に言っていると理解しています。

この「嗅ぎて」を「かつ」と読みますと、鳴くと捉えます。そうしますと、雉に向かって進んでいったら、雉は三度鳴いて飛びたつたと解します。

これを「げき・けつ」と読みますと、子路がこれに向かって進んで行くと、羽を三回広げて（三回羽ばたく）飛び去つたと読みます。

ここは色々な解説が学者でもなされていて、どれが良いとはいえません。ただ、私が好きなのは、三度鳴いて飛び去つたというものです。